

事業の背景・目的

本事業は、国内希少野生動植物種に指定され、また近い将来に絶滅が危惧されている亜種アカモズ *Lanius cristatus superciliosus* (以降、アカモズ) について、保険としての種の保存や、遺伝的多様性の維持、更には将来的な野生個体群への増強的導入を可能にするために、域外個体群の確立を目的とした活動を行う。野外個体群への負の影響を抑えるために、2023～2025年度にかけて、近縁のモズを用いた飼育下繁殖技術（自然育雛、人工孵化、人工育雛）およびファウンダー確保のための採卵技術(採卵時期による追卵の有無、卵の輸送方法)の確立と知見の収集に取り組む。また、アカモズ北海道個体群の主な繁殖地である石狩市や長野県と連携し情報を共有しながらアカモズの絶滅回避に向けた取り組み

事業の内容

ア) 近縁種モズの飼育繁殖・採卵技術の確立事業

飼育下におけるペアリング・造巢・産卵の条件について知見の集積を行った。野外巣から得た卵を用いて、適切な孵卵と将来繁殖に寄与できる個体を創出するための育雛技術について、知見の集積を実施した。



イ) アカモズのモニタリング事業
将来的なアカモズの採卵および飼育下個体の放鳥に備えて、アカモズ野生個体群の繁殖状況や餌資源について調べた。

ウ) アカモズ野生復帰技術確立及び方針の検討事業
野生復帰を行うためのプロトコルの共有や、国外の先行事例の情報収集を実施した。検討についてはアカモズ保護増殖プロジェクトとして長野アカモズ保全ワーキンググループや北海道アカモズ保全ワーキンググループと連携して実施した。

得られた成果

- ア) 事前事業で捕獲した成鳥のペアリングを実施したが、営巣までしか確認されなかった。恵庭・千歳・北広島周辺でモズの卵を採卵し、人工孵化・育雛を行い6羽が巣立ち、現在までに5羽が成育した。昨年度の孵化個体は、ヒナの段階で必要な適切な刷り込み、順化、社会化が不十分であったため、育成法を改善した。結果、あらゆる環境へと適応できる個体に生育したことから、次年度はこれらの生育個体が、自然繁殖、野生復帰に寄与できるかの評価を行い、もし状況が良ければ今後北海道のアカモズの採卵と域外保全個体群の確立について実施可能と考える。
- イ) 石狩・勇払周辺のアカモズの繁殖状況等の調査を北海道大学先崎助教授や日本野鳥の会、調査員の方の協力のもと、実施した。石狩については繁殖成功率等が安定しており、勇払については渡来数が減少していることから、今後のモニタリングの必要性がある。また餌資源調査も実施し、生息環境全体の状況が把握できつつあり、今後の野生復帰における重要な知見となった。
- ウ) 将来的なアカモズの野生復帰(長野個体群を含む)に向けての飼育法やプロトコルについて関係機関と協議した。今後の実施内容が共有され、それぞれ立場からの役割が明確化されたことで、アカモズ保全事業が大きく前進する考える。